宮本百合子選集

第一巻

宮本百合子選集

第一巻

新日本出版社

宮本百合子選集　第一巻

1968年10月25日　初　版
1974年10月15日　第9刷

著者　宮本百合子
発行者　松宮龍起

郵便番号102　東京都千代田区富士見2の13の14
発行所　株式会社　新日本出版社
電話 東京 (265) 7006 (営業)
(265) 2075 (編集)
振替番号 東京 13681
印刷　鎌倉印刷・製本　古賀製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

目次

貧しき人々の群……3
禰宜様宮田……79
三郎爺……125
風に乗って来るコロポックル……159
我に叛く……185
午市……223
光のない朝……235
古き小画……243
心の河……329

小村淡彩……353
注……371
解説……津田　孝……373
解題……戸台　俊一……387

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

貧しき人々の群

序にかえて

C先生。

先生は、あの「小さき泉」の中の、

「師よ、師よ
何度倒れるまで
起き上らねばなりませんか？
七度までですか？」

という、弟子の問に対して答えた、師の言葉を御覚えでございますか？

「否！
七を七十乗した程倒れても
なお汝は起き上らねばならぬ」

といわれて、起き上り得る弟子の尊さを、この頃私は、しみじみ感じております。

第一、先ず倒れ得る者は強うございます。

倒れるところまで、グン、グンと行きぬける力を、私はどんなに立派な、また有難いものだと思っていることでございましょう。

今度倒れたら、今度こそ、もうこれっきり死んでしまうかもしれない。

が、行かずにはいられない。行かずにはすまされない心。

ほんとうにドシドシと、

ほんとうにドシドシドシドシと、真の「自分の足」で歩き、真の「自分の体」で倒れ、また自ら起き上られる者の偉さは、限り無く畏るべきものではございますまいか。

まだ心の練れていない、臆病な私は、もしや自分が、万一倒れるかもしれないことを怖がって、一尺の歩幅で行くところを、八寸にも七寸にも縮めて、ウジウジと意気地なく、探り足をしいしい歩きはしまいかということを、どれ位恐れているでございましょう。

私は、もう二足踏み出しております。その踏み方は、やがて三度目を出そうとしている今の私にとっては、決して心の踊るように嬉しいものではございませず、またもとより満足なものでは勿論ございません。

けれども、どうでも歩き廻らずにはいられない何かが、自分の裡に生きているのでございます。

たといよし、いかほど笑われようが、くさされようが、私は私の道を、ただ一生懸命に、命の限り進んで行くほかないのでございます。

自分の卑小なことと自分の弱いことに、いつもいつも苦しんでばかりいる私は、一体何度倒れなければならないのか？

それは解らないことでございます。

けれども、私はどうぞして倒れ得る者になりとうございます。地響を立てて倒れ得る者になりとうございます。そして、たといどんなに傷はついても、また何か掴んで起き上り、あの広い、あの窮りない大空を仰いで、心から微笑出来ましたとき！　その時こそどうぞ先生も、御一緒に心からうなずいて下さいませ。

一九一七年三月十七日　　著者

一

村の南北に通じる往還に沿って、一軒の農家がある。人間の住居というよりも、むしろ何かの巣といった方が、よほど適当しているほど穢い家の中は、窓が少いので非常に暗い。

三坪ほどの土間には、家中の雑具が散らかって、梁の上の暑そうな鳥屋では、産褥にいる牝鶏のククククと喉を鳴らしているのが聞える。

壁際に下っている鶏用の丸木枝の階子の、糞や抜け毛の白く黄色くついた段々には、痩せた雄鶏がちょいと止まって、天井の牝鶏の番をしている。

すべてのものが、むさ苦しく、臭く貧しいうちに、三人の男の子が炉辺に集って、自分等の食物が煮えるのを、今か今かと、待ちくたびれている。

或る者は、頭の下に敷いた一方の手を延して、燃えかけの枝で、とろくなった火を掻きまわして、溜息を吐く。或る者は、さも待遠そうに細い足をバタバタ動かしながら、まだ湯気さえも上らない鍋の中と、兄弟共の顔を、盗み視ている。けれども誰一人口をきく者は無く、皆この上ない熱心さで、粗野な瞳を輝かせながら、ただ目前に煮えようとしている薯のことばっかりを考えているのである。

逞しい想像力で、やがて自分等の食うべき物の、色、形、臭いを想うと、彼等の眠っていた唾腺は、急

に呼びさまされて、忽ち舌の根にはジクジクと唾が湧き出し、頬ぺたの下の方が、泣きたいほど痛くなる。彼等は、頭が痛いような思いをしながら、折々ゴクリ、ゴクリと喉を鳴らし合っていた。

子供等は年中腹を空かしている。腹が張るということを曾てちっとも知らない彼等は、明けても暮れても「食いたい食いたい」という欲にばっかり攻められて、食物のことになると、自分等の本性を失ってがつがつする。

今も彼等三人が三人、皆同じように「若し俺ら独りで、こんだけの薯が食えたらなあ」と思い、いつもはいなければならない兄弟共も、こんなときには何という邪魔になることかと、しみじみと感じていたのである。それだもんで、いつの間にか鶏共が俵の破れから嘴を突込んで、常に親父から、一粒でももったいなくすると目が潰れるぞと、かたく戒められている米粒を、拾い食いしているのなどに、気のつこう筈はなかった。

鶏共と子供達とは、てんでに自分等の食物のことばかりに気を奪われていたのである。

ところへさっきから入口の所で、ジィッとこの様子を眺めていた野良犬が、何を思ったか、いきなり恐ろしい勢で礫のように、鶏の群へ躍り込んだ。

珍らしい米の味に現をぬかしていた鶏共は、この意外な敵の来襲に、どのくらい度胆をぬかれたことだろう！　コケーッコッコッコッコッコッ、コケーッコッコッコッコッコッという耳を刺すような悲鳴、バタバタバタバタと空しく羽叩きをする響などが、家中の空気を動揺させ、静まっていた塵は、一杯に飛び拡がった。

あまり騒動が激しいので、かえって犬の方がまごついてしまって、濡れた鼻で地面をこすりながら、ウロウロとそこいら中を、嗅ぎまわった。

横に垂れ下った舌や、薄い皮の中から見えている肋骨が、ブルブル震えたり、喘いだりしているのである。

この不意の出来事に、子供等は皆立ち上った。そして、一番年上の子は、火の盛に燃えついている木株を炉から持ち上げるや否や、犬を目がけて、力一杯投げつけた。投げられた木株は、ヘラヘラ焔をはきながら、犬の後足の直ぐのところに、大きな音と火花を散

らして転げたので、低い驚きの叫びを上げながら、犬は体を長く延して、一飛びに戸外へ逃げ去ってしまった。

木株の火は消えて、フーフーと、激しい煙が立ちはじめた。

この小さい騒ぎを挾んで、彼等の待遠い時は、極めてのろのろと這って行った。

けれども、ようよう鍋の中から、グッグッという嬉しい音がし始めると、皆の顔は急に明るくなり、微笑した眼が幾度も幾度も蓋を上げては、覗き込んだ。

これから暫くすると、一番の兄は、まだ朝の食物があっちこっちに、こびりついている椀を持って来て、炉の辺に並べた。これから、このホコホコと心を有頂天にさせるような香りのする薯が分けられようというのである。

一つ二つ三つ四つ。一つ二つ三つ四つ。

彼は順ぐりに分けていたが、不意に、前後を忘却させたほど強い衝動的な誘惑にかられて、皆の顔をチラッと見ると、弟達のへ一つ入れる間に、非常な速さで自分の椀に一つだけよけい投げ込んだ。そして、何気なく次の一順を廻り始めようとしたとき、

「兄にい、俺らにもよ」

と、そのときもらう番の弟が、強情な声で叫んだ。後の者も、真似をして椀をつきつけながら、兄に迫って行った。兄は、自分の失敗の腹立たしさに、口惜しそうな顔をしながら、突き出された椀の中に、小さい一切れをまた投げ込んでやった。けれども、初めに見つけたすぐ下の子は、兄のと自分のとを、しげしげ見くらべていた後、

「俺ら厭んだあ！　お前の方が太ってらあ」

と云うなり、矢庭に箸をのばして、兄の椀からその太った丸いのを、突き刺そうとした。

物も云わせず、その子供の顔は、兄の平手で、三つ四つ続けさまにぶたれた。彼は火のつくように泣き出した。そして、歯をむき出し、拳骨をかためて「薯う一つよけいに食うべえと思った奴」にかかって行った。

それから暫くの間は、三人が三巴になって、泣いたり喚いたりしながら、打ったり蹴ったりの大喧嘩が続いた。しまいには、何のために、どうしようとしてこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

んなに大騒ぎをしているのかも忘れてしまったほど、猛り立ってつかみ合ったけれども、だんだん疲れて来ると共に、殴り合いもいやになって来た。気抜けのしたような風をしながら、めいめいが勝手な所に立って、互いに極りの悪いような、けれどもまだ負けたんじゃねえぞと威張り合いながら、いつの間にかこぼれて、潰れたり灰にころがり込んだりしている大切な薯を見つめていた。

皆、早く食べたい、拾いたいと思ってはいるのだけれど、思いきって手を出しかねていると、喧嘩を始めたなかの子が、押しつけたような小声で、

「俺ら食うべ」

とこぼれたものを、拾い始めた。

これを機に、ほかの者も大急ぎで拾った。

そして、また更めて数をしらべ合うと、今はもうすっかり気が和らいで、かけがえのない一椀の宝物を出来るだけゆるゆると、しゃぶり始めたのである。

これは、町に地主を持って、その持畑に働いている、甚助という小作男の家の出来事である。

二

ちょうどそのとき、私は甚助の小屋裏の畑地に出ていた。ブラブラ歩いてそこまで来ると、思いがけず子供等の様子が目についたので、傍の木蔭から非常な興味を持って、眺めていた。そして薯のことから、喧嘩からすっかりを見てしまったのである。初めの間は、私はただ厭なものだ、あさましいものだと思っていたけれども、だんだん恐ろしいようになり、次で、たまらなく可哀そうになって来た。彼等に対して一切れの薯は、どれほど勢力を持っているものか。若し私に出来ることならうんと厭になるほど御馳走を食べさせて遣りたいというような心持も起ったけれども、とうとう、私はどうしてもあの子供等と近づきになって見ようという激しい好奇心に、すっかり打ち負かされてしまった。

私は、さっさと独りで入って行こうともしたが、何だかばつが悪い。

向うがいくら子供達でも、何だか極りが悪い。で、

私は誰か来て私を連れてってくれればと思いながらぼんやりと立っていた。裏口からは、子供等が口の中で薯をころがしたり、互いの椀の中を覗き合ったりしているのがすっかり見える。

ちょうど好い塩梅に、そのとき甚助の身内の者で、家が傍だもんで、日に一度ずつ子供ばかりで留守居をしている所を見廻っている婆が、いつものように、手拭地のチャンチャン一枚で向うから来た。

私は早速婆にたのんだ。そして、初めて甚助の家へ入って見たのである。そこいら中は思ったより穢く臭かった。

私が戸口の所に立って、内の様子を眺めていると、婆は、けげんな顔をして、ジロジロ私の方ばかり見ている子供達に、元気の好い声でいろいろ世話を焼いてやっている。

「ちゃんは今日も野良さ行ったんけ？　おとなしく留守をしてろよ。また鉄砲玉（駄菓子）買ってくれっかんな」

そして黙り返ったまま、婆が何と云おうが返事をしようともしない子供達に、何かいわせようとしきりに骨を折っても、頑固な彼等はただ、臆面のない凝視をつづけているばかりで一言も口をあこうともしない。皆が、憎いような眼をして私ばかり見ているので、だんだん私は来ちゃあ悪かったのかしらんというような心持ちになって来た。

婆は、しきりに気の毒がってかれこれとりなしにかかっても、子供等は一向そんなことには頓着なく婆がいわゆる「せうし（恥し）がっていますんだ」という沈黙を続けている。

私には、なぜ子供等がこんなに黙り返っているのかいっこう訳が分らなかった。それで、幾分蹴落されるような心持ちになりながらも、しいて微笑をしながら、

「父さんや母さんは？　淋しいだろう？」

と、一番大きい子にいうと、いつの間にか私の後に廻っていた中の子が耳の裂けそうな声で、

「ワーッ！」

とはやし立てた。

私は非常に驚いたと同時に、胸がムカムカするほど不愉快を感じた。けれども、もう一度私は繰返してみた。

「淋しいだろうね、だあれもいないで」

腹は立ったけれども、私にはまだ彼等を憫むくらいの余裕はあった。年中貧しい暮しをして、みじめに育っている子に、優しい言葉の一つもかけてやりたかったのだ。が、それにも拘らず、

「おめえの世話にはなんねえぞーッ」

という、思いがけない怒罵の声が、私の魂を動顛させる鋭さで投げつけられたのである。

私は目の奥がクラクラするように感じた。

一瞬間に、今まであった総てのことが皆嘘だったような気もする。

私は、何をどうすることも出来ずにただ立っていた。けれども、心が少し静まると、ジィッとしていられないほどに不可解な憤怒や羞恥が激しく湧き立って、非常に不調和な感情の騒乱は、肉体的の痛みのように、苦しい心持ちにさせるのであった。

私は寛容でなければならない。彼等から一歩立ちまさった者の持つ落着きを保ちつづけようとする虚栄心が臆病になりきった心を鞭撻した。けれども空虚になったような頭には何を判断する力もなくなり、歯がガチガチと鳴っている。

この意外な有様に、婆はすっかりとちってしまった。そして子供の手をグングン引っぱって下に坐らせながら私には、詫びるような眼差しで、

「行きますっぺなあ、おめえ様。礼儀もなんも知んねえで、はあどうも」

と立ち上った。私も、もう帰るだけだと思った。

婆の先に立って子供等に背を向けたとき、私は自分の上に注がれている憎しみに満ちた眼を思い、野獣のような彼等の前に、どれほど私は臆病に弱く醜く立ち去ろうとしているのかと思うと、このまま消え失せてしまいたいほどの恥しさに、火のような涙が瞼一杯にさしぐんで来たのである。

私はしおしおと杉並木の路を歩いていた。誰に顔を見られるのも堪らない心持ちでのろのろと足を運んでいると、いきなり後から唸りを立てて飛んで来た小石が、私の足元で弾んで、コロコロと傍の草中へ転がり込んでしまった。

シュウという音が鼓膜を打つや否や、私は反動的に身をねじ向けて見ると、まだすぐ近くの甚助の家の前

に、子供等がひしめき合って立っている。
年上の子供は、私が振向くと、手に持っていた小石を振り上げて、威すように身振りをした。
私は、子供等の方を見ながらのろのろと杉の木蔭へ身を引きそばめて、二度目の襲撃を防ごうとした。
私は、手触りの荒い杉の太い幹につかまりながら、訳もなく大きな涙をポロポロとこぼしたのである。

三

「何ということだ！」
あのときの様子を思い出すと、私の顔はひとりでに真赤になった。なぜ私は、あれほどの恥辱を受けなければならなかったか？　私が彼等に対していったことが悪かったか？　私は確かに悪いことはいわなかったというよりほかはない。私は同情していたのだ。ほんとうに淋しいんだろうにと思っていたばかりだ。私にはちっとも嘘の心持ちはなかった。どこからどこまでも正直な気持ちでいたのではないか？　私にはどうしても彼等の心持ちが解せない。それ故あの罵りに対しての憤りはより強く深くなるばかりなのであった。私は、お前方から指一本指される身じゃあない。人が親切に云ってやったのに石までぶつけて、それで済むことなのか？
私はほんとにあの子供達が厭であった。そして、またいつものようにあのときのことがじき村の噂に上って、小っぽけなおかしい自分が、泥だらけの百姓共の嘲笑の種に引っぱりまわされるのかと思うと、一思いに、あのこともあの子供達も一まとめにして、押し潰してしまいたいほどの心持ちがしたのである。御飯も食べられないほど私はくさくさした。
けれども、夕方近くなって、小作男の仁太というのが来て二時間近くも話して行ったことは、私に或る考えの緒口を与えた。
彼は、私共の持畑——二里ほど先の村にある——に働いている貧しい小作男で、その男が来ればきっと願い事を持っていないことはないといわれているほど、困っているのである。
私は彼の衰えた体をながめ、もう何も彼も運だとあきらめているよりほかしようのないような話振りを聞

くと、フト甚助のことを思い出した。甚助はやはりこの仁太のような小作男だ。

ああ、ほんとに彼等はこんな気の毒な小作男の子供達であったのだ！　この思いつきはだんだん私の心から種々の憤りやなにかを持ち去ってしまった。

けれども、後にはよく考えなければならない、悲しい思いが深く根ざしたのである。

あの男の子等は、今まで、その両親が誰のために働いているのを見ていたのか？

彼等の収穫を待ちかねて、何の思い遣りも、容赦もなく米の俵を運び去ってしまうのは如何なる人種であるのか？

実世間のことを少しずつ見聞して、大人の生活が分りかけて来た彼等男の子等の胸は、両親に対する同情と、常に自分等よりもずっとよけいな衣類や食物を持っていて、異った様子をし異った言葉で話す者共へ対しての憎悪と猜疑で充ち満ちていたのであろう。

俺らが大事の両親に辛い思いをさせ、涙をこぼさせるのは、あのいつでもその耳触りの好い声を出して、スベスベした着物を着て、多勢の者にチヤホヤいわれている者共ではないか？

親切らしい言葉の裏には伏兵のあることを、いつとはなく半分直覚的に注入され、「町の人あ油断がなんねえぞ」と云われ云われしている彼等であろうもの、いきなり私が現われて、優しい言葉をかけたからとて私を信じ得る筈はない。

彼等の頭には先ず第一に僻(ひが)みが閃いた。

「またうめえことといってけつかる！」

で、一時も早くこの小づらの憎い侵入者を駆逐するために、

「おめえの世話にはなんねえぞーッ！」

と叫んだのであった。彼等はもう、いわゆる親切は単に親切でないということを知っている。

貧乏はどれほど辛いかを知り、その両親へ対して生々しい愛情、一かたまりになって敵に当ろうとする一方の反抗心によって強められた、切なる同情を感じているのである。

臆気ながら、真の生活に触れようとしている彼等に比して、私の心は何という単純なことであろう！　何という臆病に、贅沢にふくれ上っていることであった

ろう！

私はまちがっていたのだ。彼等総ての貧しい人々の群に対して、自分は誤っていた。

私は親切ではあった。けれども幾分の自尊と彼等に対する侮蔑とを持っていたのである。そして、自分自身が彼等から離れ、遠のいた者であるのを思えば思うほど一種の安心と誇り――極く極く小さな気のつかないほどのものではあったが――を感じていたということを偽れようか？

自分を彼等よりは立派だと思ったことは、ただの一度もなかったか？

勿論、私は意識しながら傲慢な行為をするほど愚かな心事を持っているとは思わないけれども、長い間の習慣のようになって、理由のない卑下や丁寧を何でもなく見ていたということは恐ろしい。

私共と彼等とは、生きるために作られた人間であるということに何の差があろう？

まして、我々が幾分なりとも、物質上の苦痛のない生活をなし得る、痛ましい基となって、彼等は貧しく醜く生きているのを思えばどうして侮ることが出来よう。

どうして彼等の疲れた眼ざしに高ぶった蔑見を報い得よう！

私共は、彼等の正直な誠意ある同情者であらねばならなかったのである。

世の中は不平等である。天才が現われれば、より多くの白痴が生れなければならない。豊饒な一群を作ろうには、より多くの群が饑餓の境にただよって生き死にをしなければならないことは確かである。世が不平等であるからこそ――富者と貧者は合することの出来ない平行線であるからこそ、私共は彼等の同情者であらなければならない。

金持が出来る一方では気の毒な貧乏人が出るのは、宇宙の力である。どれほど富み栄えている者も、貧しい者に対して、尊大であるべき何の権利も持たないのである。

かようにして、私は私自身に誓った。

私は思い返した。

自分と彼等との間の、あの厭わしい溝は速くおおい埋めて、美しい花園をきっと栄えさせて見せる！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton